日本語「終助詞」の分類

丹　羽　一　彌

現代日本語の文法研究は標準語や東京語を資料としてきた。このことは，教育などを含む言語政策上からは当然かもしれないが，言語学的に見れば偏ったことである。本稿では方言も資料に含め，標準語では形にはっきり現れない「働きかけ機能」を重視して，日本語の終助詞群を分類する。その結果，終助詞，文末助詞，間投助詞の3種類となった。扱った方言の範囲では統一的な分類基準と結果を提示できたと思うが，その結果を標準語に適用しようとすると，「よ」については考えなければならないところが多い。

1　終助詞の範囲

終助詞やそのグループに属する形式はいろいろである。文の終りに接続する形式という点で言えば，伝統的な終助詞だけではなく，接続助詞や名詞など異なる起源の形式にも同じ位置に現われるものがある。特に文構成に関係させると，不変化助動詞や動詞の命令形「起きよ」「起きろ」の「よ」「ろ」も終助詞と同じような役割ということになる。しかし本稿では一般に終助詞と言われている形式のうち，服部(1950)の用語で「自由形式」と認められるものだけを扱う。例えば上の命令形の語尾や禁止の「な」は，特定の形式に接続するだけであるから，「付属形式」として除く。方言でも同様の基準により，筆者の調査資料で終助詞と認めたもの，先行の文献で終助詞として扱われている形式を対象とする。

個々の項目は方言によって異なるので，全体に共通する形式を求めたりしないし，方言の形式に相当する標準語の形式があるか否かも問題としない。本稿で述べたいのは分類基準と分類結果である。そのために対象となる形式の数は多くないし，方言によって数も形も異なる。また本稿で扱うような形式を始めから終助詞と間投助詞を分ける意見もある。本稿では分類した結果として間投助詞というグループを設定するが，最初は全部を同一平面上に置いて考える。なお分類前の終助詞群を「　」つきの「終助詞」とし，分類後の終助詞は「　」をとる。命令や勧誘の表現などに言及する場合は「終助詞」が接続するその機能についてであって，形式についてではない。

2　尾鷲市方言「終助詞」の分類

2．1　尾鷲市方言の「終助詞」

最初に扱う方言は三重県尾鷲市方言である。資料は1977年の調査で1898年生まれの男性話者から得たものである。最近の尾鷲市方言を調査していないので，現在の高年層の言語については不明である。調査当時，話者の年齢層に使用されていた「終助詞」を含む文は以下のようである。これらの①②③は丁寧さの段階であり，①が最も丁寧で，②③の順に程度が下がる。ここでは丁寧表現について一時棚上げし，後に触れる。なお当方言の丁寧表現の枠組

みとその伝統的な体系については仲・丹羽(1978)で述べた。

(1) あなたは一人で来たのか(注1)

① オマイ　ヒトリデ　キタンカイ

② イノ　ヒトリデ　キタンカレ

③ ワレ　ヒトリデ　キタンカ

(2) 私も一緒に行くよ(注2)

① ワシモ　イッショニ　イクワイ

上の例から当方言の「終助詞」を取り出すには，2種類の分節法が考えられる。カイ，ワイを1個の形式とするか，2個に切り離して，カ＋イ，ワ＋イとするかである。下の例のように，当方言のイ・レなどは，勧誘や命令，確認の表現にも単独で接続するので，2個に分離する方が妥当だと分かる。命令と勧誘の表現では③でヨを接続させる場合がある。ヨを接続させない他の表現では ϕ を設定する。

(3) 明日も一緒に行こうよ

① アシタモ　イッショニ　イコライ

② アシタモ　イッショニ　イコラレ

③ アシタモ　イッショニ　イコラ(イコラヨ)

(4) もう少し寝ておれ

① モーチョット　ネトレイ

③ モーチョット　ネトレ(ネトレヨ)

(5) この本も買うのだろ

① コノホンモ　カウンジャリ(ジャレ)(ジャロ＋イの融合した形式と考えられる)

② コノホンモ　カウンジャロレ

これらとは別に，標準語の「ね」に当たる形式も文の末尾に出現することがあり，やはり丁寧さを区別している。

(6) いい天気だね

① エー　テンキジャ　ノー

②③エー　テンキジャ　ニャー

以上の例と分節結果から，当方言の主な「終助詞」として次のような形式を認めることができる。今回はこれだけを分類の対象とする。

カ，ワ，イ，レ，ϕ(ヨ)，ノー，ニャー

2．2　分類の基準

尾鷲市方言の「終助詞」を分類するのに，文構成上の機能を重視する。個々の形式の意味は分類基準としない。基準とするのは以下の3点である。

1　他の要素との接続関係

2　文構成に関する統辞論的機能

3　他の要素との意味の照応

2．3　接続関係

第一の基準である接続関係とは，それぞれの「終助詞」がどのような形式の後あるいは前に出現するかということである。各形式の接続する環境をまとめると表1のようになる。表に見られる関係からこれらをグループに分けると，当方言の「終助詞」は「カ，ワ」「イ，レ，ϕ(ヨ)」「ノー，ニャー」の3グループに分けられる。

表1　「終助詞」の接続

		カ	ワ	イ	レ	ϕ(ヨ)	ノー	ニャー
間投	山モ・・						○	○
平叙	行ク	○	○				○	○
断定	山ジャ		○				○	○
	行クンジャ		○				○	○
	白い	○	○				○	○
	山	○						
	行クン	○						
推量	山ジャロ			○	○	○		
	行クンジャロ			○	○	○		
志向	行コラ			○	○	○		
命令	行ケ			○	○	○		
助詞	行クカ			○	○	○		
	行クワ			○	○	○		
	{イ・レ・ϕ(ヨ)}							
	{ノー・ニャー}							

第一のグループ「カ，ワ」は平叙や断定・推量などの表現に接続するものであり，標準語や諸方言に広く見られる普通の「終助詞」である。カとワでは接続に相違があるが，これは意味が関係している。判断を保留するカは判断される前の形式に接続するが，判断を確認するワは断定された形式に接続する。この第一グループの後には第二グループのイ・レ・ϕ(ヨ)が接続する。

第二のグループ「イ，レ，ϕ(ヨ)」は，推量，志向，命令の表現と第一グループ「カ・ワ」に接続する。第二グループが接続する形式の共通点は，表現される内容が聞き手に向けることのできることである。イ，レ，ϕ(ヨ)が接続するのは聞き手に向けた内容であって，話し手が現象や判断を述べるだけの形式には接続しない。また第二グループの後には何も接続しないので，これらは文を終らせる形式である。

第三のグループ「ノー，ニャー」の出現する環境は第一グループとやや似ているが，第三グループは「山もノー，海もノー」のように文節の切れ目にも出現する。ノーやニャーは直前の形式に接続しているのではなく，独立の要素としてその位置に出現していると考えられる。またこれらの後に他の形式が接続することはない。必ずポーズがあり，文を終らせたり中断したりする。その点では第二グループに似ている。

当方言の「終助詞」を現れる環境によって分類すると3グループなる。

指定の表現に接続して後に第二グループが接続するもの　カ　ワ
聞き手に向けた表現に接続して後に何も接続しないもの　イ　レ　ϕ(ヨ)
前の形式とは独立に出現して後に何も接続しないもの　ノー　ニャー

これらそれぞれを，終助詞，文末助詞，間投助詞と命名し，本稿でも以下ではそう呼ぶことにする。終助詞は，その後に文末助詞という他の形式が接続するので，別の名称にしてもよいが，日本語文法ではカやワなどが最も一般的な終助詞とされてきたから，ここでも伝統的な名称を充てる。

2．4　統辞論的機能

第二の基準は，それぞれの助詞が文構成に果たす役割である。結果として上の3グループと同じ分類になるので，グループごとに見ていくことにする。

終助詞(第一グループ)のカやワの役割は，情報となる意味内容の一部を分担して表現することである。これらの要素によって疑いや確認など話し手の態度が表されるのであって，これらが接続しなければ，伝えたい意味の表現は十分ではない。しかし終助詞が接続して情報の内容が完成しても，文としての機能が表されたことにはならない。これらの終助詞(第一グループ)は，伝達内容の意味を分担しているだけであって，文の機能には関係していないからである。例えば

トッサン＋オル＋カ　　(お父さんは＋居る＋判断保留)

は(　)内のような意味の合計である。この形式が文として使われた場合には，「居るだろうか」という話し手の疑いや「そうか，居るのか」のような判断を受け入れる内容の文ということになる。これは話し手が判断を保留しているのであって，聞き手に向けて質問しているのではない。質問文となるためには聞き手に働きかける機能を持つ必要がある。芳賀(1954)は標準語「か」について「事柄を志向する話手の主観」を表す形式だと述べ，《疑い》＋《反応を求める》＝《問い》としているが，当方言でも同様である。働きかけの機能とその形式については次の文末助詞のところで述べる。

筆者はこの終助詞(第一グループ)までを述語構造の中に含めて考えている。終助詞は述語構造の意味を分担する要素であり，その構成要素である。文法的には文法接辞(助動詞)など他の分節的要素と同等の要素である。

文末助詞(第二グループ)は伝達される内容に何も付け加えない。上のカやワなどの終助詞によって完成した情報，あるいは命令などの内容に働きかけ機能を持たせるだけである。上述のように，カが接続しても聞き手に質問したことにならず，判断を控えた単なる意味の合計か，文として使われても，話し手自身の個人的な疑いにすぎない。これらの構造に文末助詞イ・レ・ϕ(ヨ)のどれかが接続すると，特定の聞き手に向けた質問文になる。勧誘や命令など他の表現においても同様である。

働きかけの機能について少し追加する。本稿では，文の伝達される内容とその内容に対する話し手の判断や態度を下のように表記する。

[[表現内容] 表現態度]

このうち［表現態度］の詳細は別の機会に考えたいので，ここでは大雑把に話し手の態度や判断としておく。第一グループのカやワなど話し手個人の疑いや確認などはここに入る。これは伝達される情報を構成する部分であり，聞き手の存在とは直接の関係がない。働きかけ機能とは，そのような［[表現内容] 疑いや確認］全体を特定の聞き手に投げかけて，聞き手の返事や行動を求める機能である。従って働きかけ機能は対話の場面での話し手と聞き手

の人間関係に左右されるものであり，伝達される［［表現内容］表現態度］とは次元の異なるものである。本稿では働きかけを表す部分を［表現態度］から分けるので，働きかける文の構造は次のような三層になっている。

［［［表現内容］表現態度］働きかけ］(注3)

具体的な例では次のような構成になる。

［［［トッサン　オ］ルカ］イ／レ／φ］

［聞き手に［話し手が［お父さんが居］ることへの疑い］質問］

［［［アシタモ　イッショニ　イ］コラ］イ／レ／φ(ヨ)］

［聞き手に［話し手が［明日も一緒に行］く意志］勧誘］

このように文末助詞は，聞き手に向けられて質問や勧誘などとなる［［表現内容］表現態度］だけに接続するのであって，表1で見たように，「行く」「山ジャ(山だ)」など聞き手に向けられていない内容には接続しない。

文末助詞は，限られた意味の［［表現内容］表現態度］という構造の外に接続し，前接の構造に働きかけの機能を付加するだけである。その点で，文を構成する助詞ではあるが，［表現態度］を構成する終助詞カやワなどとは異なるレベルの機能を表している。当方言の働きかけを含む構造は，部分的な不一致はあるにしても，芳賀(1954)の「伝達」や南(1974)の分類によるD段階に近いものと思う。また働きかけ機能を意味として見れば，仁田(1991)の「発話・伝達のモダリティ」の4種のうち，聞き手存在としている「働きかけ」「問いかけ」をまとめたものに相当する。しかし仁田とは異なり，筆者の立場は形式重視であるから，これらの機能を表す一定の形式の方を問題とする。

間投助詞(第三グループ)も，文末助詞と同様に働きかけ機能を持つ。ただし接続関係で述べたように，間投助詞は，断定などの表現の後や文節の切れ目に現れるから，前の内容とは独立に出現するのである。文の一部分として他の構造に接続して出現するのではない。

エー　テンキジャ　ノー／ニャー

という形式は全体で1個の文ではない。前半で「いい天気だ」と断定して，後半の間投助詞で聞き手に前文を投げかけるという2文の構造である。間投助詞は，一語文ともいうべき形式であり，希薄ではあっても情報の中身となる意味を持ち，それに働きかけの機能が付加されたものである。この場合の中身は，聞き手も「いい天気だ」ということを認識しているという話し手の判断である。間投助詞は，聞き手に向けていない情報を聞き手に投げかけるために，単独で出現する形式である。

統辞論的機能で分類すると，次のように分類できる。

終助詞　　［表現態度］を構成する分節的意味を表す。

文末助詞　特定の［表現態度］に接続し，［働きかけ］機能を表す。

間投助詞　他の構造と関係なく，単独で［働きかけ］機能を表す。

2．5　意味の照応

第三の基準，他の要素との意味の照応というのは，文法的な「係り結び」のような現象ではなく，ある要素の形式の選択が意味の面で他の要素と関係していることである。本稿の内容に則して言えば，丁寧さの段階という点で，文中の要素が超分節的に影響し合っているか

否かである。従ってこれは文体やスタイルの問題と言ってもよい。

ここでは文末助詞から述べる。文末助詞は対話の場面で特定の聞き手に働きかける機能を表す。聞き手が特定されれば，待遇という問題が発生し，その聞き手にふさわしい丁寧さを伴って働きかけることになる。従って働きかけの文では同時に丁寧さも表している。最初に棚上げしておいたが，文末助詞イ・レ・ϕ(ヨ)はそれぞれ①②③という丁寧さの段階を区別して表現している。文構成に参加する文法的な単位として見れば，終助詞カやワに匹敵するのは，文末助詞というグループであって，働きかけというのは文末助詞グループとして持つ機能である。個々のイやレは，このグループの果たす役割の中で「丁寧さの程度」という文体的変異を分担しているだけである。当方言の丁寧表現は働きかけ機能に付随して現れる二次的産物であり，それぞれの段階は働きかけ機能の中での下位分類にすぎない。

丁寧さの段階は，話し手と聞き手の関係によって決まるもので，その文を特定の文体やスタイルにするものである。スタイルは文全体あるいは談話全体の表現を統一するので，文中のそれに関係する要素全てに影響する。前述の例(1)には聞き手である相手を指す代名詞が用いられているが，それらは，丁寧さの段階によって｛オマイ・イノ・ワレ｝と形を変えて出現し，文末助詞の｛イ・レ・ϕ(ヨ)｝の段階に対応している。段階の異なる形式の共起，①オマイと②レ，③ワレと①イのような共起は原則としてない。

間投助詞も働きかけと同時に丁寧さの段階を表現しているので，こちらも代名詞の各形式と対応した形となっている。

(7)　あなたのところの犬だね

①　オマイトコノ　イヌジャ　ノー

②　イノトコノ　　イヌジャ　ニャー

③　ワレトコノ　　イヌジャ　ニャー

丁寧さの段階という文体に見られる，文末助詞，間投助詞，代名詞(対称・自称)の間の照応関係は下のようである。

	相手	自分	文末助詞	間投助詞
①	オマイ	ワシ	イ	ノー
②	イノ	オレ	レ	ニャー
③	ワレ	オレ	ϕ(ヨ)	ニャー

オマイ・イノ・ワレ及びワシ・オレは，「相手」・「自分」と「丁寧さの段階」という２種の意味を表しているが，これは内容を表す辞書的意味とその場面での丁寧さという次元の異なる意味であり，分節的な意味としては「相手」・「自分」だけである。同一の意味を表しながら場面によって形が異なる現象は，位相論でいう様式論の問題と考えてよい。文末助詞や間投助詞グループを１個の文法的単位と考えれば，その中での個々の変種の選択は，文法の問題ではなく，社会言語学的分野の問題である。

終助詞と他の形式の間には上のような照応関係はない。終助詞は，［表現態度］の意味を分担する分節的要素であるから，必要ならば他の要素に関係なく出現するし，不必要なら出現しない。その形式も，前後の要素との形式的な同化はあるにしても，原則としてカやワなど一定である。丁寧さに関しては，文末助詞とは照応関係がないから，前述の例(1)のようにカイ・カレ・カϕと全ての文末助詞と共起している。

終助詞群を他の要素との意味の照応という点で分類すると次の2種類に分けられる。

1　終助詞　　形式が一定していて，他の要素との照応関係がない。

2　文末助詞　間投助詞　　丁寧さの段階に対応した形式が選択される。

2．6　分類結果

以上の基準で検討したことを整理すると次のようになる。一つの特徴について＋－で表さず，個々の特徴について見ていくので不均衡になる。

1	他の形式に接続する	カ	ワ	イ	レ	φ(ヨ)	
	他の形式を接続させる	カ	ワ				
	独立に出現する						ノー　ニャー
2	情報の分節的意味表す	カ	ワ				(ノー　ニャー)
	働きかけ機能を表す			イ	レ	φ(ヨ)	ノー　ニャー
3	他の形式と照応する			イ	レ	φ(ヨ)	ノー　ニャー

これらを総合して尾鷲市方言の終助詞群を分類すると，下の3種類に分けることができる。

終助詞　　カ，ワなど

文末助詞　イ・レ・φ(ヨ)

間投助詞　ノー・ニャー

この3種の関係を見ると次のようになる。まず形式的に見て，当該形式が他の形式に接続して出現することを「終助詞」の条件とすれば，終助詞と文末助詞がそれに該当し，独立に出現することのできる間投助詞は別の種類となる。次に文構成に関る機能を見ると，述語構造の外という文の最後尾，または単独で出現して働きかけ機能を表す文末助詞と間投助詞とが一つのグループをなし，情報の中身を表す終助詞だけが別の種類となる。しかし名称にはこだわらないが，これら3種を「終助詞」の下位分類としてではなく，助詞全体の下位分類として，格助詞，副助詞，接続助詞などと同等の位置にあるものと考えたい。

なおよく問題とされる「承接」関係は，これらを別種のものと考えれば問題にしなくてもよいが，「終助詞」の中の問題とすれば，終助詞＋文末助詞の順であって，1個の文成分の中ではそれ以外の連続はない。

3　諸方言の「終助詞」

3．1　稲沢市方言の「終助詞」

次に愛知県稲沢市方言を取り上げる。以下の「終助詞」は，1980年当時の稲沢市内農業地域における複数の中高年男性を話者とした伝統的な形式である。稲沢市は愛知県の西部に位置し，高年層や一部の中年層では母音連続アイ・ウイ・オイの融合が激しく，アイは［æ:］，ウイは［y:］，オイは［φ:］である。本稿は精密な記述資料の作成を目的とする訳ではないので，音韻論的にアイ，ウイ，オイと表記する。

(1)　形式

この方言の「終助詞」として分類の対象とする形式は次のようである。これらの助詞については丹羽(1982)でも触れているが，今回のような視点での分類は試みていない。

ワ，ゾ，カ，ガ，イモ，イ，ヤ，ナモ，ナー

結論を述べれば，ここでも尾鷲市方言と同じ基準による三分類が原則として成立する。以下では分類された結果と説明に必要な例を列挙するに止める。

(2) 終助詞

上のうち，ワ，ゾ，カ，(ガ)は終助詞である。これらは［表現態度］の分節的意味のみを表し，特定の聞き手に向けた働きかけという機能は持たない。終助詞の特徴については尾鷲市方言と同様である。

(3) 文末助詞

イモ，イ，ヤは文末助詞である。これらは分節的意味を持たず，働きかけの機能だけを表す。この方言でも，文末助詞グループの役割は主張や質問などの表現を特定の聞き手に向ける機能であり，個々の形式の役割はその下位分類である丁寧さを表現することである。この方言の丁寧さには，①上／②中／③同／④下の4段階があり，③は対等，④は対等以下に使用される。対応する形式は，段階の高い方からイモ／イ／ϕ／ヤである。この方言では対等の聞き手に対する場合，選択肢としてϕを設定する必要がある。

まず終助詞に接続する場合から見る。この方言でも聞き手に働きかける内容の構造に文末助詞の中から1個が選択されて接続する。ただし尾鷲市方言とは異なり，推量や命令の表現には接続しない。志向の表現には終助詞カが接続した場合のみ，その後に接続できる。ただし意味は，イクカの場合が聞き手に向けた質問文であるのに対し，イコカの場合は同意を予定した勧誘である。下の—の部分はゾイとゼ2種の形式がある。ゼは当方言ではゾ＋イの融合した形式であって，単なる終助詞ではない。この点は後に標準語について考える場合の参考になる。空白の部分は例外もあるが，詳細は省略する。

行くよ　イクワ｛イモ／イ／ϕ／ヤ｝
行くぞ　イクゾ｛イモ／—／ϕ／　｝
行くか　イクカ｛イモ／イ／ϕ／ヤ｝(注4)
行くよ　イクガ｛イモ／イ／　／ヤ｝
行こうか　イコカ｛イモ／イ／ϕ／ヤ｝

この方言の文末助詞は，疑問詞の出現した文で各種の形式(終助詞以外の形式)に直接接続し，特定の聞き手に向けた質問文にする。標準語ではカによって表される機能が，文末助詞によって聞き手ごとに丁寧さを区別した質問にされるのである(注5)。ただし形容詞にはカを経て接続し，直接の接続はない。この用法は敬意の含まれるイモ・イの場合が多いようである。イを例にすると以下のようなる。

イツ　ハナン　サクイ	(何時花が咲きますか)	［咲く＋イ］
ダレン　ナイトルイ	(誰が泣いていますか)	［トル＋イ］
イツ　イリャースイ	(何時いらっしゃいますか)	［敬語ヤース＋イ］
ドコン　シズカダイ	(どこが静かですか)	［静かだ＋イ］
アレワ　ダレダッタイ	(あれは誰でしたか)	［過去た＋イ］
ナンダイ	(何ですか)	［断定だ＋イ］

(4) 間投助詞

ナモ・ナーは間投助詞である。これらは単独に出現し，働きかけ機能を持つ。文構成の機

能も，具体的な表現内容を示さずに特定の聞き手に投げかける［働きかけ］であり，意味，役割とも，ほぼ尾鷲市方言のノー・ニャーに当たる。ただしナーは男性だけが使う形式であるし，ナモは文末助詞のように終助詞に接続して，特別に丁寧な働きかけの表現として用いられることもある(注6)。

(5)　意味の照応

この方言でも，文末助詞と代名詞，間投助詞と代名詞の間に丁寧さの照応がある。このことからも，文末助詞と間投助詞個々の形式の持つ意味が，丁寧さという文体を統一する超分節的なものであることが確認できる。

ワシモ　イクワ｛イモ・イ｝　（私も行きますよ）
オレモ　イクワ｛φ・ヤ｝　（おれも行くよ）
オマイサントコデ　ナモ　（あなたの家でね）
オマイントコデ　ナー　（お前の家でな）

(6)　分類結果

以上から稲沢市方言の終助詞群を分類すると，尾鷲市方言と同様に，次の3グループに分類できる。承接関係も終助詞＋文末助詞の連続だけである。

1	終助詞	接続して出現し分節的意味だけを持つ	カ，ワ，ゾ，ガ
2	文末助詞	接続して出現し働きかけ機能だけを持つ	イモ・イ・φ・ヤ
3	間投助詞	単独で出現し働きかけ機能を持つ	ナモ・ナー

3．2　他の方言の文末助詞

尾鷲市方言と稲沢市方言の終助詞群は，形や用法にいくらかの相違はあるが，同じ基準で終助詞，文末助詞，間投助詞という3グループに分類できた。そこで次にいくつか他の方言の「終助詞」を概観する。ただしカなどの終助詞についてはどの方言でも大差ないと思われるので，問題となるのは働きかけ機能を持つ文末助詞や間投助詞である。

文末助詞による働きかけ機能とそれに伴う丁寧表現は，三重県の熊野灘沿岸部に広く見られるものである。尾鷲市に比較的近い三重県北牟婁郡紀勢町方言では意味の照応による丁寧さの程度は次のように2段になっている。伝聞「そうだ」のチュは「という」の融合した形であり，全体としては「という＋ワ＋｛イ・レ｝」である。返事は応答の「はい」に当たる形で，「何ぞ＋｛φ・レ｝」であろう。

	質問	伝聞	間投助詞	返事
目上	カイ	チュワイ	ノー	ナンド
同等以下	カレ	チュワレ	ニャー	ナンドレ

従ってこの方言でも，終助詞「カ，ワ，ド」，文末助詞「イ・レ」，間投助詞「ノー・ニャー」という分類で，尾鷲市方言とほとんど同じであることが分かる。この地点は1997年ころに複数回，当時の中・高年層数人を調査したものであるが，基本的な枠組みはそれより20年前の尾鷲市の高年層と同様であった。

江端(1978)によれば，愛知県知多市方言では，主張のガン・ガイ・ガ，ワン・ワイ・ワ，疑問のカン・カイ・カ，などによって，丁寧態(敬意あり)・常態(敬意あり)・卑態(敬意なし)を表現し分けている。これらのンやイは情報の中身を変えることなく，丁寧さの程度だ

けを変えているので，終助詞ガ，ワ，カに文末助詞ンやイが接続して働きかけ機能を表していると思う。ただし江端はこれを敬語法として論じている。

働きかけの文末助詞を持つのは，三重県や愛知県のような限られた地方の方言だけではない。文末に付加することによって簡単に働きかけ機能や丁寧さを表現できるので，いろいろな形式が各地で用いられるようである。楳垣(1974)などによれば，青森から福島まで東北地方では広く見られる。福島県の例を見てみよう。

飯豊(1974)によれば，福島県の伊達郡保原町方言では「文末助詞『ナエ・カエ・ゾエ・ワエ』（中略）がついて対者尊敬表現の形式を示す」とのことである。このエは他方言のイに当たるものであろう。

ソーワ　オモワンニェ　ナエ　（そうは思われませんね）
コレワ　ゴジッキロ　ガエ　（これは50kgですか）
マエワ　イガッタンダ　ゾイ　（前はよかったんですよ）

出されている例文によれば，文末助詞エ・イは間投助詞のナや終助詞のガやゾに接続していて，本稿で述べる働きかけ機能を表現しているようである。

楳垣(1974)によれば，関東地方はそれほど多くないようであるが，存在しないわけではない。例えば伝統的な東京方言の話しことばにはある。永田(1935)によれば，次のように質問文に接続するイやエがある。

ナンデスイ　何をクダズッタイ
今あの人どこにイルイ　なぜでゴザイマスエ
時にどうしたとユーンデスエ　あの時おまえさん何とイッタエ

これらは全て疑問詞による質問文であり，文末助詞は動詞その他各種の形式に直接接続している。こういう接続の仕方は稲沢市と同じであり，文末助詞によって疑問を聞き手に投げかけるという役割も同じである。ここでは丁寧語デスやマスにさらにイやエが接続している例がある。丁寧語によって丁寧さが，イやエによって働きかけが表され，役割の分担があったと思われる。こういう連続は，『坊っちゃん』（『夏目漱石全集』1927改造社による）の主人公の台詞部分に，「夫ぢゃ何を氣を附けるんですい」「一體どう云ふ譯ですい」などが散見されることから，当時の普通の言い方であったと思われる。現代東京方言でも，中高年男性の話しことばでは「何だい」「どこだい」「そうかい」など，疑問詞や疑問の終助詞カと文末助詞イが共起して使われるようであるが，これらは疑問という点で共通している。こういう表現は明治・大正の東京方言を継承した形である。

西の方では九州にも見られる。野林(1969)によれば，熊本県牛深市方言の疑問のカは，「実際の発言の場での使用に不適当な乱暴さを持ち合わせている一方，相手の反応を強いるだけの効果を持ち合わせていない」ので「聞き手への待遇がからんで，多少とも発問事態を和らげる必要から，聞き手の同意を求める間投的なナー・ノー・ネーとともに用いられる」「発問事案の過不足のない行きつきを計る必要から，聞き手への接近・開発を計る助詞イ・エとともに用いられる」とし，カノー・カナー・カネー，カイ・カエ，カノイ・カナイが挙げられている。

また「イ・エが動詞に添えられて，聞き手に対する開発と心理的な接近の効果を高める表現が作られる」と述べ，

シゴッ　シューイ　　（仕事しようや）
モー　オキューエ　　（もう起きようや）
オリャー　イカンデカ　アンタバッカリ　イケイ
（俺は行かないから，あんただけ行けよ）

の例で，「意志助動詞がイ・エをともなわないで作られる意志表現を当方言で聞きつけることはむずかしい」「イが加えられたばあいと，単純な動詞の命令表現，つまり，行ケイと行ケでは，行ケイの方が実用的なうえ，かえって，待遇度も高い」という解説がついている。

野林の説明はいつも難しいが，終助詞に接続したり，勧誘や命令の表現に直接接続しているイ・エは働きかけの機能と丁寧さを表す文末助詞と考えてよいと思われる。従ってこの方言でも，疑問のカなどの終助詞，ナー・ノー・ネーの間投助詞，イ・エの文末助詞という3グループに分類できることになる。

3．3　諸方言のまとめ

本節ではいくつかの方言の「終助詞」を見てきた。尾鷲市方言を分類するのに用いた3個の基準によって，諸方言の終助詞群は以下の3種類に分類できた。

終助詞　　他の形式に接続して，表現態度を構成する分節的意味だけを持つ
文末助詞　他の形式に接続して，対話の場面での働きかけ機能だけを持つ
間投助詞　単独で現れて，希薄な分節的意味と働きかけ機能を持つ

またこれらの連続する形式は，終助詞＋文末助詞，方言によっては間投助詞(終助詞に近い用法)＋文末助詞であって，これ以外の連続形式はない。

本稿で強調したいのは文末助詞というグループの設定である。これによって文中の機能も承接関係も統一的に説明できる。文末助詞は，形式的には，文末という述語構造の外に出現して他の分節的要素と統辞論的な関係がなく，意味的には，情報の中身とは別次元の対話の場面で聞き手に働きかける機能だけを表している。尾鷲市方言のように2種類以上の形式があれば，丁寧さの段階を区別して表現できるが，イ・エだけの方言では丁寧さや親しさを表すか否かである。これがイ・エと ϕ で丁寧さの段階を区別しているかどうか，先行研究を見ても明らかではない。

文末助詞が働きかけ機能を持つのは各地で広く見られることであり，決して僻地の方言の特殊な現象ではない。終助詞と文末助詞はともに他の形式に接続して出現するが，これらを分ける基準は，情報の中身を構成する分節的意味，場面で聞き手に向ける働きかけ機能，このどちらを持つかである。この分類基準が日本語の文法に有効であると言えるのは，さらに多くの方言や標準語で試した後のことである。ところが方言関係の分野では，文末助詞個々を個別に論じ，丁寧表現のための敬語形式として扱っているものが多い。文構成という観点から，文末助詞グループ全体を働きかけ機能と結びつける考え方をしているものはほとんどない。しかし本稿で述べてきたように，文末助詞グループの基本的な役割は聞き手への働きかけ機能である。丁寧さやその程度というのは，個々の形式が持つ意味であり，特定の聞き手に働きかける機能の二次的な産物にすぎない。文の構成という文法の原点から見るためには，働きかけ機能の方を重視すべきであろう。

4　標準語の「終助詞」

4．1　標準語の話しことば

そこで次に，働きかけ機能という基準を適用して標準語の「終助詞」の分類を試みる。

標準語には方言にない大きな特色がある。書きことばの存在である。書きことばに出現する「終助詞」はカだけである。カは「内容に対する話し手の疑い」という分節的意味が明確であるため，使用しなければ情報が完成しない。その他の形式は，意味が対話の場面でのことであるから，話しことば専用の要素である。しかし標準語の話しことばというのは文学作品の台詞など，虚構である。現代日本語の資料として文学作品などから例を集めることが多い。これは客観的のように見えるが，年齢も出身地も異なる作家達のことばを一つの言語として扱うことになる。こうして得られるものは平均的な共通語か東京語の話しことばであろう。研究者自身の内省に頼る場合には言語経歴が関係するから，ある程度の誤差を見込んでおかなければならない。

話しことばであれば，全国共通語とか東京周辺の言語ということになる。私生活の具体的な場で使用された言語は地域の方言であり，東京語の話しことばも同様である。しかし現代の東京語は複雑な言語であり，単純に地域のことばとはいえない。江戸時代には関東のことばに上方のことばが混じり，明治時代以後は人の動きによって各地のことばが混じってピジンとなり，それが現在ではクレオールとして存在する。これに似た現象はどの方言にも起きたであろう。ただ他の方言は話しことばだけで受動的であったが，東京語の方は，標準語という地位を得て活動的になり，書きことばと連動した動きもあるので，地域性が乏しく，伝統的な体系が維持されていない部分も多い。「終助詞」についても同様である。

4．2　先行研究

文構成に関係してということで，先行研究は二三見るに止める。以下では原文で「　」つきや平仮名で表記されている形式を全てカタカナにして引用する。

比較的早い時期のものとして佐治(1957)の分類がある。これは接続関係を見ていて，文構成に関っているかのようであるが，構文論的な機能については触れていない。またワ／トモ／ゾ・ゼ３種を並列してそれぞれに意味を与えているが，女性語ワと男性語ゾ・ゼの両方を自分のことばとして使う個人はいない。異なる人達に使われる形式個々に意味をつけて羅列しても，それは辞書に過ぎないのであって，体系とか分類にはならない。細かいところは意味中心であり，機能によって分類できているとは思えない。

渡辺(1953)は「陳述に与る終助詞を格助詞その他の叙述辞から区別して，これだけが厳密な意味での辞である」と述べている。以後，渡辺は「終助詞」を意義職能の段階によって次の３種に分け，渡辺(1971)など多くを発表している。陳述論の一部として「終助詞」を論じているので，基準は明確である。

第１類	判定とのつながりを持つ	カ　サ　ワ　ゾ(ゼ)　ナ(禁止)
第２類	判定を離れて対象への訴えを表す	ヨ(イ)
第３類	聞手への呼びかけだけを表す	ネ(ナ)

本稿では冒頭で述べたように禁止のナは除く。上の分類を本稿の定義で言えば，第１類は分節的意味だけを持つ終助詞と置き換えることができる。また第３類は，聞き手への呼びかけだけとされているが，これを，分節的意味は希薄であるが，独立に現れて働きかけ機能を表す形式と解すれば，本稿の間投助詞に当たる。問題となるのは第２類であり，ヨとイをまとめるのは問題である。これについては後で考えることにする。またこれら相互の承接関係は第１類＋第２類＋第３類の順であるとするが，これも後に触れる。

この渡辺説に対して反論したのが鈴木(1976)である。また後にそれを補って鈴木(1988)も発表された。鈴木(1976)では，話し手と聞き手の関わり合いという観点から分類すべきだと主張し，男性語と女性語とに分けて系統樹風に分類している。男性の場合は図１のようになっている。しかし同一言語であるから，基本的枠組みのところは二つを重ねて男女の形を並置すべきであろう。鈴木の説明は渡辺説より細かいところまで及んでいるが，最終的な小分類が意味中心になっている。このように細かく分けるのは意味であって文法の枠組みではない。鈴木説のＡのａが渡辺説の第１類に当たり，イの所属が異なるが，a'が第２類，Ｂが第３類にあたる。承説関係は，渡辺が３種全部の連続を認めたのに対し，２種の連続しか認めず，鈴木の分類で言えば，a—a'，a—Ｂ，a'—Ｂのいずれかとしている。

鈴木説で注目すべきは，ヨとイを別物としたイの位置付けである。鈴木(1988)では，イが疑問詞＋ダや疑問のカと共起することが論じられている。しかし疑問詞文の場合，ダ＋イを複合辞として，それ以上の説明がない。カ＋イの場合の説明も細かいが，文構成からというより，意味を重視しているように見える。しかし佐治や渡辺にヨと同一視されて無視されていたイに光を当てたのは鈴木の功績である。

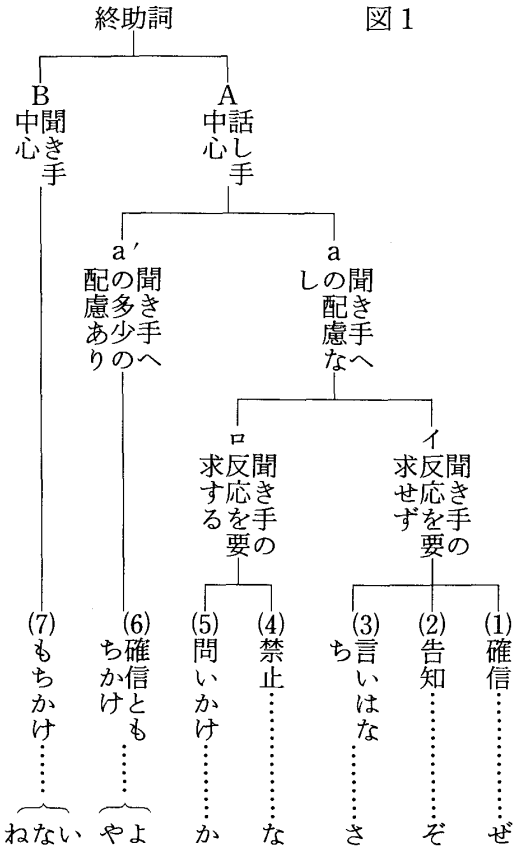

図１

４．３　ヨ・イなどの問題

問題はヨやイである。渡辺説ではヨとイを，その前の佐治説ではヨ，イ，エ，ヤを同じものとして扱っている。これは残念ながら観察が不十分のためではないかと思う。ここではこのヨについて考える。

ヨ・イ・エ・ヤの接続関係を見ると，筆者の内省や知識では表２のようになっている。明治期の小説などを含めたとしても出現しそうもない連続

表２　ヨなどの接続

		ヨ	イ	エ	ヤ
終止形	行く	○			
命令形	行け	○			○
志向形	行こう	○			○
助詞か	行くか	?	○	○	
疑問詞＋だ	何だ	?	○	○	
体言	山	○			

（女性語）

があり，これらを一括して扱うのは問題であることが分かる。表の？は俗語か標準語か筆者には判断できないものである。

表2の分布からこれらはヨ・ヤとイ・エに分かれる。このうちエはやや古風な表現に思われるので，対象から除く。ヤはほとんどヨと同じと考えられるが，筆者の内省では不明なところが多いので保留にしておく。残るヨとイは，表2では相補分布の関係にあるが，両者は環境によって姿を変えた結果とは思えないので，ヨとイを同一形態素に該当する異形態とは解釈できない。鈴木がこれらを異なるものとして分類しているのは正しい。

まずイの方から見ると，これは本稿でいう文末助詞である。イは終助詞カや疑問詞＋ダに接続して，親しみを込めて聞き手に問いかける役割を果たしている。このイは前節で述べた明治・大正期の東京方言の形式を受け継いだもので，働きかけという固有の機能を持つ形式である。イについて鈴木(1988)は意味を細かく述べて分類しようとしているが，本稿で述べたような文末助詞を設定し，疑問詞や疑問のカの文を聞き手に投げかけるための働きかけ機能を持つとすれば，統一的に述べられると思う。また鈴木(1976)では聞き手中心のもちかけとして，イ・ナ・ネを同じグループに入れている。しかし本稿で述べてきたように，イは文の末尾だけに出現する形式であるが，ネは文節ごとに出現できるし，単独で呼びかけにも使える形式である。これらは別の種類とすべきである。

このイについて細かいことを言えば，鈴木(1976)はゼの後に他の形式が接続しないことを重視し，それを渡辺説の問題点の一つとしている。そしてゼの特異性をその意味で説明しようとしているが，ゼについては別の見方をした方がよいと思う。前述のように稲沢市方言のゼはゾ＋イであるから，筆者は標準語の場合も同様に解釈する。これは筆者だけの独断ではない。というのは『日本国語大辞典』(小学館)その他二三の辞書でも，終助詞「ゼ」を「ぞえ」のつづまった形としているからである。そうであればゼには既に文末助詞イの機能が加わっているので，その後に他の形式の接続はない。ゾの分節的意味は前接の内容を強く言い切ることであり，「頑張るゾ」のように話し手自身に向ける場合にも，「殴るゾ」のように聞き手に向ける場合にも使われる。後者は働きかけ機能によって聞き手を脅すのではない。この違いは，動詞の意味と場面によって聞き手にも話し手自身にも向けられたことになるのであって，辞書的意味が特定場面で実現した結果である。しかしゼは，このゾの意味にイの機能を加えた形式であるから，イの働きかけ機能によって言い切りの意味が聞き手に向けられている。ゾとゼは機能的に異なった形式である。個々の形式の意味や話し手の意図も重要ではあるが，諸形式による internal reconstruction も重要であると思う。

形の融合のついでにもう一つ触れると，ネ＝ナ＋イと解釈すれば，ネが聞き手に向けるだけなのに，ナが「雨かナ」という独り言に使用できる理由も説明できる。ただし本稿でもそこまではしない。

次にヨであるが，ヨの役割は簡単ではない。表2でヨは終止形・命令形・志向形および体言に接続している。終止形に接続したヨは，話し手の判断が確定・終了している内容を聞き手に向けている。これは「寒いヨ」「静かだヨ」「行ったヨ」「降るらしいヨ」など，動詞以外の終止形の場合も同様である。しかし「寒い」「行った」のような現象の叙述を聞き手に投げかけるのは，返事や反応を要求する働きかけ機能とは異なる向け方である。ヨは，統辞論的機能によって働きかけているのではなく，ゾの強い言い切りのように，辞書的意味によ

って聞き手に向けているのではないか。そうであればヨは終助詞に入ることになる。終止表現に接続したヨは終助詞であり，前述の枠組みで言えば［［［行っ］たヨ］］ということになる。

命令形や志向形に接続したヨは働きかけ機能を持っているように見える。「行こう」だけでは自分の意志か聞き手に向けた勧誘かが表現されていないが，ヨを接続させることによって勧誘であることが表現されるからである。命令形に接続した場合も同様である。「止まれ」は多数の対象に対する号令であるし，命令形は「雨，雨，降れ，降れ」のように，話し手の希望や独り言の場合でも使えるが，「止まれヨ」のようにヨをつければ特定の個人に向けた命令になる。従ってこの場合のヨは文末助詞に相当する形式で，その構造は［［［行］け］ヨ］ということになる。

体言に接続したヨは女性語である。「あ，雨ヨ」「富士山ヨ」などは，男性ならば「だ」をつけて発話する。渡辺説ではこのような女性語は無統叙ということになるが，現代語では統叙したものが聞き手に向けられていると考えた方が妥当であろう。文節に接続している場合も同様である。女性語では，ヨが文節に接続して「私だけヨ」「そんな所へ行くからヨ」「そうヨ，お茶を飲みながらヨ」「行ってヨ」などが使われる。これらは文節が体言相当の形式としてヨを接続させていると考えられる。体言や文節に接続した女性語のヨは，「だ」の断定の意味を併せ持ち，それを聞き手に向けていると考えられる。言語現象としては，疑問のカが接続した「富士山カ」「私だけカ」「そうカ，お茶を飲みながらカ」などと似ている。ヨがカと同様であれば，「前の形式を断定的に聞き手に向ける」という意味が辞書的な意味に中に含まれることになり，ヨは，カと同様の終助詞と解釈される。以上のように解釈すると，統叙された終止形＋ヨの場合もその枠組みで考えることができる。「行く」「寒い」という意味を断定して聞き手に向けるのである。

しかし命令形や志向形の場合をこのように考えることは無理であろう。命令や勧誘はもともと外に向けるものであり，叙述ではない。ヨが「行けという内容」「行こうという内容」を断定的にまとめ，「行けなのだよ」「行こうなのだよ」という意味で聞き手に向けていると考えると，引用しているのと同じことになる。これらの場合のヨはやはり，働きかけ機能を持っていると考えざるを得ない。ただしヨには文末助詞が持つ待遇性も意味の照応もない。上述のイは，特定の場面における人間関係の表現という感じがあり，使える文体も限られている。ところがヨは，話し手や聞き手が誰でもよく，場面や人間が感じられない。また意味・用法とも汎用的であり，終助詞カと同様の分節的要素の特徴が目立つ。ヨに働きかけ機能があるとしても，それは，イとは異なって，東京語独自の枠組みによるものであろう。

渡辺(1971)の第2類は問題を持っている。ヨとイとは分けて位置づけをしなければならない。その点では鈴木(1976)の方が妥当である。本稿では終助詞群全部を統一的な基準で説明しようとした。それによれば，イは働きかけ機能を持つ文末助詞である。ヨは上に見たように両面を持つ形式である。このように前接の内容によって機能が異なるということでは問題が残るが，今のところ下のような構造をもつと解釈しておく。

［［［行］くヨ］］［［［富士山］ヨ］］［［［私だけ］ヨ］］，［［［行］け］ヨ］［［［行］こう］ヨ］

これは仮の結論ではあり，解決ではない。この難問を解決するためには，接続関係や統辞論的機能だけではなく，本稿で述べた以外の基準を考える必要があるのかもしれない。

ヨの用法としては，この他に名詞にヨが接続して呼びかける場合があるが，これは別の形式であろう。「太郎ヨ」は全体で間投助詞ネと同じ働きをしているので，働きかけ機能のように見える。しかしこのような呼びかけは普段の生活で使われることはない。やはり今回のヨとは別であると思う。

4．4　分類

ヨに関しては問題が残っているが，仮に本稿の基準で終助詞群(鈴木説の男性語)を分類すると下のようになる。禁止のナは除くし，ゼはゾ＋イと考える。また「だからサ」のように文節の切れ目に現れるサは，「終助詞」的なところのない形式であるから，終助詞のサと別の形式として除く。

終助詞	カ・ゾ	その機能を持つもの	サ　(ヨ)
文末助詞	イ	その機能を持つもの	ゼ　(ヨ)
間投助詞	ネ		

これらが連続する場合は，終助詞カ・ゾと文末助詞イの場合である。ゾ＋イはゼとなって出現するので，実際の形式はカイだけである。ネは単独で出現できる間投助詞であるから，他の形式の後にネが現れても，同一の文成分内で両者が共起しているのではない。

この分類を見ると，ヨとゼ以外は渡辺説とほとんど同じである。またイ・ヨ以外は鈴木説とも近い。渡辺説，鈴木説，本稿で異なるのは，イ・ヨである。結局標準語で問題となるのはヨであろう。上の分類は，方言で見たように，働きかけ機能と接続関係という基準を重視し，新たに文末助詞と間投助詞という「品詞」を設定して分類したものである。この方法によれば，イとネは手際よく分類でき，接続関係も整理される。しかしそれでも，ヨについては問題が残ったままである。

5　述べたいこと

終助詞群の諸形式を分類するには，話し手の意図や個々の意味を細かく詮索することも重要ではあるが，分類基準としては，統辞論的な機能や形式的な構造を重視した観点から論じた方が客観的で説得力がある。

標準語でも方言でも日本語の枠組みはある程度一致していると思う。標準語を資料とした日本語文法には，働きかけ機能という文法的概念も，文末助詞という「品詞」も認められていない。しかし標準語も方言も日本語であるという視野で説明しようとすると，これらを認めた方が統一的に分類できる。

注

(1)　質問文には，①よりも丁寧と思われる次のような表現もある。

アンタ　ヒトリデ　キタンカナ

しかしこのナで終る表現は，初めて道で会った人に使用するような特別丁寧な，しかも質問文だけに使用される形である。仲・丹羽(1978)では，これを新しく発生した共通語的な形式であると考

えた。

また質問文には次のようなドという助詞のつくものもある。しかし当時の調査が不十分だったため，カとドの相違が十分把握できていない。ここでは例に入れなかった。ドはカより狭い範囲に接続するようである。

ドコエ　イットッタンド｛イ・レ・ϕ｝　　（どこへ行っていたのか）

(2) 主張する表現では②③の区別がない。なおこの②③では予想されるワ＋レやワ＋ϕではなく，例外的にジョという１個の形式が使われている。熊野灘沿岸地方にはワレという形式の聞かれる地域もあるので，この表現には地域差が目立つようである。

②③　オレモ　イッショニ　イクジョ　　（私も一緒に行くよ）

本稿ではこのジョを便宜的にワ＋レとして扱う。また例(4)命令の②はネトレーであるが，同様にネトレ＋レとして扱う。

(3) 文としての「トッサン　オルカ」（お父さんがいる＋疑い）が［働きかけ］を欠く構造なのか，ϕを持った構造なのか，まだ十分検討していない。

(4) このカの場合，聞き手が動作主になる文では尊敬語が関り，少々例外的な様相を見せるようであるが，ここでは省略する。

(5) 南(1964)においては，Dの段階を構成する要素として，疑問関係のことば(「なに」「だれ」「いつ」「どこ」「なぜ」その他)が入っている。当方言の例はこれに相当する。南説の一般性を高く評価したい。しかしその後の理論発展のためか，南(1974)ではこの疑問詞に関する部分が除かれているようである。

(6) 当方言にはヨーという形式があり，これも間投助詞の一種と考えられるが，出現する環境がナモなどとは異なり，用言の終止形や終助詞などの後には出現しない。ヨーは，話し手が用意した情報を聞き手に丸ごと投げかけるのではなく，聞き手の注意を引くように呼びかける形式であるから，言い切りの後には出現しない。本稿で述べているような「終助詞」としての機能はないので，ここでは除く。

引用文献

飯豊毅一（1974）「敬語研究資料について」（『敬語講座10敬語研究の方法』明治書院）

楳垣　実（1974）「方言敬語心得帳」（『敬語講座９敬語用法辞典』明治書院）

江端義夫（1978）「尾張知多半島の一小方言の敬語法」（『方言研究叢書８方言敬語法』三弥井書店）

佐治圭三（1957）「終助詞の機能」（『国語国文』26-7）

鈴木英夫（1976）「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」（『国語と国文学』53-11）

鈴木英夫（1988）「終助詞についての構文論的研究―問いかけと省略を中心にして―」（『国語と国文学』65-3）

仲しづ子・丹羽一彌（1978）「尾鷲方言の丁寧表現」（『東海学園国語国文』13）

永田吉太郎（1935）「旧市域の音韻語法」（『東京方言集』国書刊行会1976）

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』（ひつじ書房）

丹羽一彌（1982）「文法」（『新修稲沢市史　研究編六　社会生活　下』新修稲沢市史編纂会）

野林正路（1969）「熊本県深海方言　文法」（『九州方言の基礎的研究』改訂版　風間書房1991）

芳賀　綏（1954）「”陳述”とは何もの？」（『国語国文』23-4）

服部四郎（1950）「付属語と付属形式」（『言語研究』15　『言語学の方法』岩波書店1960によった）

南不二男（1964）［述語文の構造］（『国語学研究』18　『日本の言語学３文法Ｉ』大修館書店1978によった）

南不二男（1974）『現代日本語の構造』（大修館書店）
渡辺　実（1953）「叙述と陳述－述語分節の構造－」（『国語学』13/14）
渡辺　実（1971）『国語構文論』（塙書房）